令和７年度霞ヶ浦学講座「まゆ玉のふしぎ」実施結果

実施日時：令和７年７月 26 日（土）10:00－11:30
場所：霞ケ浦環境科学センター多目的ホール
講師：田﨑秀子さん（養蚕農家、まゆクラフト作家）
　　毛利みゆき（霞ケ浦環境科学センター）
工作補助：関幸子（まゆクラフト研究会）
参加者数：51 名（子ども 28 名　大人 23 名）

概要

養蚕農家・まゆクラフト作家の田﨑秀子さんを講師に招き、前半はカイコの一生、養蚕の歴史、養蚕農家のお仕事について学習しました。後半は、まゆクラフトを作りました。

１）まゆ玉って何

カイコは、なぜ、まゆ玉を作るのでしょうか。その謎を解くために、まず、カイコの一生を学習しました。卵からふ化した１齢幼虫が脱皮しながら成長し、5 齢幼虫の時にまゆを作ります。5 齢幼虫は、まゆの中でさなぎへと変化し、やがて成虫となります。カイコは、さなぎという無防備な状態の時に、身を守るためにまゆを作るのです。

また、まゆの糸は、一本の糸でできていて 1500ｍもの長さがあります。人間はこの糸を紡いで絹織物を作っています。着物の生地一反を作るには約 2480 個ものまゆが必要です。

時々、質問やクイズが出されましたが、中にはとてもカイコに詳しい参加者がいて、手を挙げて知っていることや考えを発表してくれました。

２）養蚕の歴史

養蚕は中国で始まり、朝鮮半島を経て日本に伝わりました。奈良時代には税金として絹織物が各地から中央政府に収められていました。日本では明治以降に外国に輸出するようになり、一時は世界一の輸出量を誇りました。

霞ヶ浦周辺でもカイコのことを「お蚕（こ）さま」と呼び、大切に飼われていました。昔は今よりずっと大変な作業でしたが、人々は道具を進化させ、共同飼育を行うなどして、作業の負担は軽減していきました。当時、養蚕は女性が活躍する場でもあり、若いころ田﨑さんも稚蚕共同飼育場で作業を行っていました。稚蚕の入った大きな木箱（1ｍ×2ｍ）を高々と積み上げる作業がとても大変だったとおっしゃっていました。

３）養蚕農家のお仕事

田﨑さんは、茨城県で現在 3 軒しかいない養蚕農家です。普通の養蚕農家のように糸は取らずに、卵を産ませる成虫を育てることが仕事です。

現在ではエサとして人工飼料を与える方法が広まっていますが、田﨑さんは人工飼料を一切使わず、自分の畑にある桑の葉だけを与えて飼育を行っています。養蚕で最も気を遣うのがカイコの病気です。田﨑さんは、昔ながらの方法で、ストーブや扇風機を使って温度、湿度に気を付け、カイコの様子や天候を見ながらえさの量を調整して、大切に育てています。

カイコが桑の葉を食べる様子を動画で見ると、胸肢で葉をつかみ上下に頭を動かしながら食べている様子を見ることができます。たくさんの幼虫が一斉に葉を食べる音は、まるで雨が降っているかのようでした。また、目のように見える部分は眼状紋という模様で、実際の頭はその先にある小さな部分であることもわかりました。

４）まゆクラフト体験

田﨑さんはまゆクラフトの達人で様々な作品を作っています。田﨑さんの指導により、参加者はまゆクラフト（うさぎつくり）を行いました。

まず、白いまゆの底を切ります。まゆはとても丈夫なので、なかなか切れず保護者に手伝ってもらう児童もいました。中から乾燥したサナギと幼虫が脱皮した皮が出てきて、びっくりしながらも、サナギを手に取り、珍しそうに観察していました。

白いまゆに耳や手、目、鼻をつけると、うさぎの完成です。同じ材料なのに、個性があり、うさぎの表情もみな違っています。自分だけの作品を仕上げて参加者は満足そうでした。

作品作りをしながら、まゆの丈夫さ、内側のつるつるの手触り、何層にも重なっている様子に気づく参加者もいました。

（文責　小川）